

^

ドンマイ!!
茜川オダマキーズ

(第三話)

主な登場人物

織田真紀―オダマキーズ捕手・キャプテン

海藤知慧―前同二塁手・副キャプテン

早田里菜―前同・一塁手

桐林沙月―前同・三塁手

龍野季穂―前同・遊撃手

城内美青―前同・監督

麓飛鳥―前同・中堅手

本村香苗―前同・左翼手

水上小夜―前同・右翼手

杉崎寿音―前同・投手

麓栄治―飛鳥の父【麓喜軒】店主

海藤凌雲―知慧の叔父

園内裕美―スーパーマーケット・パート従業員

北浦宗春・銀嶺学園生徒・裕美の元恋人

権藤凜子―朝霞学園女子野球部監督

岡坂恵里―朝霞学園女子野球部部員・投手

白石澄香―朝霞学園女子野球部部員・捕手

○河川敷のグラウンド

真紀たちのチームと朝霞学園女子野球部の試合が始まる。

先攻は朝霞学園。マウンド上の寿音。速球で先頭バッターを三振にきつてとる。続く二番三番も。ガッツポーズで立ち上がる真紀。頷きながらベンチに戻る寿音。

× × ×

真紀たちの攻撃。

相手ピッチャーは恵理。一番沙月、二番知慧、三番季穂、三者連続三振。

× × ×

朝霞学園の攻撃。バッターボックスに澄香。二球続けての大飛球。三球目、ドロップを投げる寿音。澄香空振り三振。

寿音「つしゃ！」

悔し気にバットをたたきつける澄香。後続二人も三振に打ち取る。

× × ×

真紀たちの攻撃。

四番の飛鳥がバッターボックスに入る。恵理を睨む。

恵理、第一球。山なりのスローカーブ。不意をつかれ手が出ない飛鳥。ストライク。二球目もスローカーブ。たたらをふんだようになりスイングをする飛鳥。空振り。三球目は目の覚めるような速球。手を出せない飛鳥。三振。

五番寿音、六番里菜も三振。

× × ×

朝霞学園の攻撃。またしても三者三振にうちとる寿音。これで九者連続三振。

× × ×

真紀たちの攻撃。

七番香苗、八番真紀、九番小夜、三者連続三振。恵理も九者連続三振。

× × ×

朝霞学園の攻撃前。ナインを前に話をする凜子。

凜子「あの子の球は見切ったわよね」

朝霞学園ナイン「はいっ！」

凜子「よし、この回で心を折ってやりなさい」

朝霞学園ナイン「はいっ！」

バッターボックスに立つ一番。バントの構えでゆさぶる。

三球目をセーフティーバント。マウンドから駆け下りる寿音。

ボールを掴み一塁の里菜へ投げるが暴投。

続く二番バッター、一塁ランナーが大きくリードを取り、何

度も牽制球を繰り返す寿音。五球目、走る一塁ランナー。

真紀「いち、にっ！」

一塁の知恵に投げる真紀。

真紀「やばっ！」

暴投。ランナーは三塁まで進む。

三番、レフトにフライを打ち上げる。

飛鳥「うわっ、来た！」

香苗、猛然とダッシュ。だが追いつけない。香苗の前に落ち

るボール。朝霞学園一点先制。

四番の澄香。二球続けてのストレートに追い込まれるが、三

球目のドロップを狙いましたようにバット一閃。

打球は高々と上がりホームラン。がっくりと膝に手をつく寿

音。

× × ×

朝霞学園の猛攻、真紀たちの拙守が繰り返される。

× × ×

スコアボード、朝霞学園攻撃欄にチヨークで記される15の

文字。

× × ×

ベンチにいる美青のところへやってくる凜子。

美青の前に立つ。うつむいたままの美青。

凜子「顔上げて」

うつむいたままの美青。

凜子「あげなさい！」

凜子を見る美青。

凜子「まだ続ける？ 永遠に試合終わらないわよ」

美青「……」

凜子「大口ばかり叩いた結果がこれよ。よく分かった？ 監督さん」

美青「……」

凜子「続けるの？ どうなの」

美青「……」

凜子「黙ってないで答えなさい！」

美青「——もう、やめます」

凜子「そう。ねえ、あなた、テレビで将棋って見たことある？」

美青「え」

凜子「将棋はね、負けた方が勝った方に頭を下げるの『負けました』

って。それが礼儀よ。ほら、早く頭を下げなさい」

凜子「分かる？ わたしは今あなたに教育をしているのよ。大人へ

の、教師への態度も口のきき方も知らないあなたへね。素直に負

けを認めることもできないのあなたは」

美青「——負けました」

深く頭を下げる美青。凜子、頷き。

凜子「もう少しは勝負になるかと思ってたけどね。打者二巡目で勝

負あったか。(マウンドの寿帆を見て) 残念ねえ、あなた。うちに

来てればわたしがちゃんと指導してあげられたのにな」

去りかける凜子。振り返って美青を見て。

凜子「うちにはね、親元から離れてまで懸命にやってる子がいるの。

あなたたち見てるとね、わたしたちの野球をバカにされてるみた

いで腹が立って仕方ないのよ」

グラウンドから去る凜子と朝霞学園ナイン。

ベンチに座る美青。

誰もが戻ってくる。

寿音「みんな、ごめん」

真紀「——寿音が悪いんじゃないよ」

寿音「打たれたわたしが悪いんだ」

美青「ごめんね。わたし、みんなに恥ずかしい思いさせた。あの監

督に乗せられて試合をしようって言ったわたしが悪いんだ」

うつむいたままの美青に声をかけられないでいる九人。

○河川敷の道

トボトボと歩く真紀たち十人。

やがて——

沙月と季穂が二人、離れる。

里菜が一人離れる。

香苗、小夜、飛鳥の三人が離れる。

真紀、知慧、寿音、美青の四人が並んで歩いて行く。

知慧がひとり離れる。

真紀、寿音、美青が並んで歩いて行く。

○【アドラブル】店内

カウンター席に並んで座り、フルーツパフェを食べている沙月と季穂。

沙月「やっぱさ」

季穂「うん」

沙月「甘かったんだよ」

季穂「うん」

沙月「さすがに朝霞の野球部だよ」

季穂「うん」

沙月「もっと上手くないとね」

季穂「うん」

沙月「ちょっとあんた、『うん、うん』ばっか言ってるの?。」

季穂「——美青のためにさ、勝たないとね」

沙月「え」

季穂「美青がいちばん悔しかったんだよ、今日」

沙月「——うん」

季穂「あの子の悔しさ、絶対晴らさなきゃ」

沙月「だよね」

黙々とフルーツパフェを食べる二人。

○峰陽寺・寺内・本尊前

大の字になって寝転がっている知慧。

凌雲が入ってくる。

凌雲「お行儀が悪いぞ」

知慧「ご本尊様に足は向けてません」

苦笑して胡坐をかく凌雲。

凌雲「勝敗は兵家も事期せず、羞を包み恥を忍ぶは是れ男児——知

慧は女の子だけだな」

凌雲を見る知慧。

凌雲「江東の子弟才俊多し——茜川に才俊はいないか」

知慧「——なんかもう今日のおじさんうるさい」

凌雲「捲土重来、未だ知るべからず、だ」

知慧「——ほんとにうるさい」

ごろつと横臥する知慧。笑っている凌雲。

○早田家・里菜の姉、真耶の部屋の前

壁にもたれて座っている里菜。

里菜「で、結局放棄試合。わたしもたくさんエラーしちゃってさ」

うつむく里菜。

里菜「美青が、朝霞の監督に頭下げてさ——」

里菜、鼻をすすり上げ、泣く。

真耶の部屋、扉の下のわずかの隙間から紙が差し出される。

里菜「え」

紙を手にする里菜。〈野球の話し、もつとききたい〉の文字。

里菜「お姉ちゃん——うん、うん、あのね」

扉に向かって話し続ける里菜。

○ファミリーレストラン・店内

四人掛けテーブル席。並んで座っている真紀と寿音。

二人に向かい合っている美青。

美青「『キャッチャーはグラウンドの監督である』」

真紀「え」

美青「野村克也さんの言葉。だから今日の負けはわたしと真紀の責任」

寿音「そんな、わたしが打たれたから負けたんだ。真紀も美青も悪くない」

首を横にふる美青。

美青「もつとエゴイストにならなきゃ寿音は。『こんなすごい球打たれたのはおまえの責任だ』くらいに思わなきゃピッチャーは。そんで真紀は——」

真紀「うん」

美青「打たれたらわたしが全部の責任とるから思い切って投げてこい』って思わなきゃ。それがキャッチャーなの。今日の負け、自分に責任があるって思っていないよね」

真紀「そんなこと、ないよ」

美青「ほんとに？ 寿音が打たれたからだって、少しでも思っていない？ 打たれたのは全部自分のせいだって、心から言える？」

真紀「——それは」

美青「ごめんね。わたし、いやなヤツになって、みんなを巻き込んだ」

美青をじっと見つめる真紀と寿音。

寿音「えーっとね、美青」

美青「なに」

寿音「それは、自意識が過剰ってやつだ」

美青「え」

寿音「朝霞に勝ちたいって思ってるのは、美青だけじゃない。あの

監督にムカついているのは美青だけじゃない。だよ、真紀」

真紀「え？ あ、あ、うん。そうだよ。そりゃあ、そうだよ」

寿音「——なんか今、知慧の気持ちがあつた気がするわ」

真紀「なによお、それ」

二人を見て笑う美青。

○【麓喜軒】店内

厨房で調理をしている栄治と信和。その隣で皿を洗っている

飛鳥。

飛鳥「お父ちゃん」

栄治「なんだ」

飛鳥「もう少ししたら友達二人くるから」

栄治「野球のか」

飛鳥「そう」

栄治「分かった」

×

×

×

四人掛けのテーブルに座っている飛鳥、香苗、小夜。

テーブルに乗っているゴマ団子の皿とオレンジジュースの入

ったコップが三つ。

テーブル席で裕美がビールを飲みながらギョーザとから揚げ

を食べている。

飛鳥「香苗」

香苗「なに」

飛鳥「言っているよ思っていること」

香苗「思ってることって?」

飛鳥「あるでしょ」

小夜「うん、あるはずだよ。言ってる」

香苗「じゃあ——やっぱり、ちょっと疲れたかな。いっぱい動いて。

でも、そんなの気にしないで」

飛鳥「だからさ、それじゃダメなんだよ」

香苗「え」

小夜「うん。それじゃダメなの。わたしたちだってフライ捕れるよ

うにならなきゃ」

香苗「うん。あのさ」

飛鳥「なに」

香苗「やっぱり違うよね、みんなで投げあってるボールと、ホント

のフライって」

小夜「うん、ちがう」

香苗「バットで打ったボールでずっと練習したら、絶対上手くなる

のよね」

飛鳥「うん——あれ?」

裕美に気づく飛鳥。

飛鳥「ほら、あの人」

裕美を見る二人。

香苗「あ」

小夜「前に練習見てた」

香苗「うん」

じつと裕美を見る三人。裕美、その視線に気づき、三人を見

る。しばらく見つめあう。また食事に戻る裕美。

飛鳥「——あの」

飛鳥を見る裕美。

飛鳥「あの、すみません。わたしたちの練習や試合、見てた人です

よね」

裕美「練習や試合って?」

飛鳥「――すみません。人違いでした」

裕美「あれが練習とか試合って言うんやったら、わたしやけど」

また食事に戻る裕美。

飛鳥「あの、それってどういう意味ですか」

裕美、また三人を見て、ビールをグツと飲む。

裕美「言うたとおりの意味やけど」

飛鳥「だからそれってどういう意味かって聞いてます」

栄治「飛鳥、おまえお客さんになに言ってるんだ」

飛鳥「お父ちゃんは黙ってて。わたし今この人に話がある」

香苗「ごめんなさい、急に。でも、なんでわたしたちのこと見てく

れてたのか気になって、それで」

裕美「なんでかって？ そらあんまり下手くそやったからやん。ド

下手がキャッキヤ言って練習のまねごととして、おっさんチームと

試合して勝った負けたって言うてんのが笑うてまうくらいおもしろ

かったから。そやから見ててん。これでええやろか」

飛鳥「ちょっと、あんたね」

飛鳥を抑える小夜。

小夜「はい、下手なんですわわたしたち。今日も朝霞学園の女子野球

部と試合してボコボコにされちゃって」

裕美「あんたらが朝霞の女子と。はははっ。ようやるわ。勝てると

でも思うたんかいな。あそこ去年軟式の全国大会で準優勝してる

ねんで。なんぼピッチャーの球が速よてもあんたらのママゴト野

球が通用するかいな」

飛鳥「ママゴト野球って、ちょっとね」

飛鳥を座らせる香苗。

香苗「もう、飛鳥は黙ってて！ 詳しいんですね。経験されてる方

ですよね」

ため息をつく裕美。

裕美「給料出たから奮発して中華屋来ただけなんやけどなあ」

頭を下げる栄治。

栄治「あいすみません。娘らが失礼なことを——もし、よかったら、少し話だけでも聞いてやってもらえませんかでしょうか。本日のお代はサービスさせていただきますので」

また溜息をつく裕美。苦笑して。

裕美「オトンまで参戦かあ——経験者やって言うたら」

小夜「ソフトですか、野球ですか」

裕美「野球や」

香苗「指導の経験とかは？」

裕美「——ある——ここまですてえな。ごちそうさま。遠慮なしにごちそうになります。美味しかったからまた来ます」

店を出ていく裕美。うなずき立ち上がる三人。

○前同・店を出たところの路上

帰っていく裕美。店を出た三人。

香苗「あの！」

振り返る裕美。

裕美「なんやいな、まだなにか用かいな。ええかげんにしてえや」

香苗「あの、わたしたちの練習みてください！」

小夜「フライとか打てますよね！ ノックとか打てますよね！ お願ひします。わたしたちに指導してください！」

飛鳥「失礼なことといってすみませんでした！ 最初はわたし、たしかに遊び半分だったけど、今日朝霞に負けて、美青がああ監督に頭下げてるの見て、本気で朝霞に勝ちたいって思ったんです！ だから、一度わたしたちの練習、みてください！ お願ひします！」

深く頭を下げる飛鳥。

香苗・小夜「お願ひします！」

二人も深く頭を下げる。三人をじっと見る裕美。

裕美「明日も明後日も昼からも仕事や。三日後やったら空いてる。葬儀場の駐車場行ったらええんか？」

頭を上げる三人。

飛鳥・香苗・小夜「はいっ、ありがとうございます！」

裕美「けど、これ一回きり。それでこらえてえや」

顔を見合わせる三人。

裕美「不満なん。不満やったらその一回もなしや」

香苗「——いえ、それでいいです！ 三日後、お待ちしています！

よろしくお願いします！」

飛鳥・小夜「お願いします！」

また頭を下げる三人。苦笑いして帰っていく裕美。

○【悠蓮会館】第三駐車場

サードを守っている沙月にノックをしている裕美。沙月の練習着は砂まみれになっている。膝に手をつき、荒い息を吐いている沙月。それをみている里菜、知慧、季穂、内野陣の練習着も砂で汚れている。

裕美「もう終わりかいな？」

沙月「……誰がっ！ こいつ！」

裕美「元気だけは一人前やね」

鋭い打球のノックを放つ裕美。とびつく沙月。取れない。

里菜「マジでギリギリのところ打ってくるよね」

知慧「うん」

季穂「でも、あのノック全部取れるようになったら、絶対上手くなるよ」

里菜「だよね」

× × ×

外野に散っている飛鳥、香苗、小夜の三人。

レフトの飛鳥に向かってフライを打つ裕美。

飛鳥「あわわわ」

両手バンザイをするようにしてボールを追う飛鳥。追いつけず、取れない。

裕美「手え挙げてボール追ってどないすんの！ 捕球体制になるの

はボールの下に入ってから！ 捕らなくてええから、ボールの手前まで走ってきなさい！ 分かった！」

飛鳥「はい！」

再びフライを打ち上げる裕美。

× × ×

真紀を相手に投げている寿音。その横に立っている裕美。

裕美「草野球のグラウンドにはピッチャーズプレートはあるんやね」

寿音「はい」

裕美「どこに立ってる？」

寿音「どっつて、真ん中に」

裕美「意識が低い」

寿音「え」

地面に足でプレートの長方形を書く裕美。

裕美「三塁側、一塁側、真ん中、それぞれの中間。プレートに置く

足の位置で球筋は全然変わってくる。自分に合ったプレートの位

置を見つけないさい」

寿音「はい」

三塁側のプレート位置に立ち、ボールを投げる寿音。糸を引

くようなストリートが真紀のグラブに収まり、驚く寿音。

裕美「満足しない。五ミリずつ足をずらすくらいの気持ちで最良の

位置をみつけなさい」

寿音「はいっ！」

× × ×

自分の上空高くボールを打ち上げる裕美。真紀が空を見上げ、

ドタバタとボールを目で追う。

真紀「あら、おろ、あら……おわっ！」

激しく後ろに倒れる真紀。その腹に落ちてくるボール。

真紀「いでっ！」

真紀を見て笑う裕美。

裕美「あんたがいちばんたいへんかもなあ」

× × ×

裕美の前に並んでいる真紀たち十人。

美青「今日は、本当にありがとうございました」

真紀たち「ありがとうございました！」

裕美「おっちゃんチームからのおさがりのバットが一本とボールが十個。ノック打てる人間もいてへん。それでよう朝霞と試合やろうって思ったもんやわあんたら。満足した？」

美青「いえ、全然」

裕美「ん？」

美青「これからもご指導、お願いします」

裕美「最初に言うたやろ。約束はこれ一回きりやって」

美青「今日の指導受けて、誰も一回で納得なんかできません」

頷く真紀たち。

美青「あの、どちらで指導をされておられたのですか？ 学校で教

えてらしたんですよね」

裕美「ん？——」

ふふっと笑う裕美。

裕美「わたしなあ、子供にも教えたらあかん人間やねん」

美青「え、それってどういう——」

裕美「今日はなんか楽しかった。二度と野球教えることなんかないって思ってたからなあ。けど、ほんまに今日で最後。これつきりや。あんたら教えてふんぎりついたわ。ありがとう」

去ろうとする裕美。立ち止まり振り返って。

裕美「そうやな。『大阪市、女子野球部監督、懲戒免職』でネット検索してみ。そしたらあんたら二度とわたしに教えてもらいたくないって思わんはずやから」

去っていく裕美。その後ろ姿を見送るしかない真紀たち。

○西川高校・中庭（日替わり・昼休み）

芝生の上に座っている真紀たち十人。知慧、プリントを手に

持っている。

知慧「車の中で男子生徒にキスカあ」

飛鳥「どこの駐車場だったけ」

知慧「なんか、遊園地だった」

沙月「交際してたって書いてたよね」

知慧「うん。デート中だったって」

季穂「それ見つかったのか」

知慧「たまたま家族で遊びに来てた他校の教師が見つけたって書いてある」

小夜「やったのかな、その子と」

知慧「やったって?」

小夜「だから、アレ」

プリントに目を落とす知慧。

知慧「そこまでは書いてない。『男子生徒が好きだった。感情のまま走ってしまった。教職にあるものとして許されないことをした』だって」

真紀「で、懲戒免職か」

知慧『女子野球部監督の女性教諭、男子生徒にわいせつ行為』かあ

——

美青「——わいせつかどうかなんて、分からないよ」

知慧「え?」

美青「そんなの、新聞が書いてるだけでしょ。わたし、二人が納得してキスしたのなら、べつにそんなのいいって思う」

寿音「でも、先生と生徒だよ。それってやっぱりマズいことなんじゃないの?」

美青「そうだけど……みんなはイヤ? そんな人に指導してもらおうのって? そんな人に教えてもらったこと、後悔してる?」

真紀「それは——」

香苗「あのさ、話し聞いてみない?」

里菜「話って、園内さんから?」

香苗「うん。この新聞記事だけじゃわかんないよ。わたしさ、あの人が男の子に、その、わいせつ行為するような人には思えないんだ」

飛鳥「うん、わたしもそれは思う」

考え込む十人。

真紀「でも、話し聞くなってどうやって？ たぶんあの人もう練習見に来たりしないと思うよ」

香苗「見に来なかったらこっちから追っかければいいじゃん」

真紀「追っかける？」

香苗「うん。どっか行く途中で試合見てたんだから、それ追っかけてって話しを聞けばいいんだよ」

香苗をじっと見つめる十人。

沙月「香苗ってさ、そういう人だったんだね」

照れくさそうに笑う香苗。

○河川敷のグラウンド

守備についている、フレッシュボイスと対戦している真紀たち。

グラウンドの上、道をやってくる裕美の自転車。

自転車を止め、試合を見る裕美。それに気づくベンチの美青。

美青「みんな、来たっ！」

美青以外の全員が試合を投げだし、駆け出す。それに気づき、慌てて自転車をこぎ出す裕美。土手を駆け上がっていく真紀たち。

○河川敷上の道

必死で自転車をこぐ裕美。必死で追いかける真紀たち。

真紀「待って！ ねえ、待ってください！」

裕美、逃げる。沙月が先頭に立ち、猛然と裕美を追いかけ始める。

沙月「うおおおっ！ 待てえっ！」

全速力で走る沙月。だがその距離は縮まらない。

沙月「くっそおっくっ」

裕美、逃げ切ったかと思えたが、ふいに減速。自転車から降りる。慌てて裕美のところまで走っていく沙月。裕美、沙月を見て。

裕美「チエーン、はずれた」

薄く笑う裕美。やがて追いついてくる真紀たち。

裕美「なんやねんな、もう」

知慧「ネット検索、しました」

裕美「そうかいな。で」

知慧「新聞の記事も、読みました」

裕美「ふーん。分かったやろ、わたしのこと」

知慧「分かったのは、新聞の記事に書いてあることだけです」

裕美「それが全部やけど」

知慧「園内さんからは何も聞いてません」

裕美「は？」

知慧「教えてください、本当はどうだったのか。わたしたち園内さんが自分からそんなこと——」

裕美「なんであんたらにそんなこと言わなあかんのや！」

激昂に驚く真紀たち。

裕美「思いだしたあもないこと、なんであんたらに言わなあかんのん！ 恥かせて楽しいんか！ 記事に書いてあったやろ！ わたしは男子生徒とつきあって、キスしたわいせつ教師や！ それでチョウメンになった淫行教師や！ それ以上でも以下でもないわ！」

自転車を押し始める裕美。

裕美「ほんまに、もうこれつきりにしてえや。仕事やねん、行くわ」
飛鳥「そうよ、あんたは淫行教師よ！ わたしたちになにも言わなかったらね！」

小夜「飛鳥、ちょっと」

飛鳥「言わせてよ。いいの本当に、わたしたちに淫行教師って思われたまま終わっても——本当にいいんですか」

裕美「べつに、かまへん」

香苗「『かまへん』でない、わたしたちは！」

驚く裕美。

香苗「教えてください、本当のことを。そうじゃないと、わたした

ち今からあなたの仕事場までついていきます！」

誰もが頷く。裕美、全員を見渡し苦笑して。

裕美「今日は昼までなんや。一時にあの駐車場でええか」

全員「はいっ！」

裕美「ほんまに幻滅しても知らんで——ああ、遅刻や。電話せな」

ポケットから携帯電話を取り出し、通話しながら自転車を押していく裕美。その後ろ姿を見送っている真紀たち。

○【悠連会館】・駐車場

ベンチに座っている裕美。その前に立っている真紀たち十人。

裕美「あんたらは今からわたしに恥かかせるんや。一生忘れへんからな、あんたら全員の顔」

凝った顔の十人。語りだす裕美。

裕美「わたしは大阪の銀嶺学園っていう共学の私学で、体育の教師やった。女子野球部の監督もやった。全国大会にも出たことがある。朝霞とやったこともある。負けたけどな——」

○銀嶺学園・グラウンド（裕美の回想）

グラウンドで部員相手にノックの練習をしている裕美。生き生きと部員たちを叱咤激励しながら。その様をバックネットの裏から見ている男子生徒。気づく裕美。にっこりと笑う男子生徒。

裕美（声）「バックネットの裏ですつと練習してる男子生徒がいた。

最初は部員誰かの彼氏かと思ってたけど、そうやない。その子——北浦宗春くんはずっとわたしを見てたんや」

○職員駐車場（以下裕美の回想）

帰ろうと車に乗ろうとする裕美。

宗春「先生」

裕美、振り向くと宗春が花束を抱えて立っている。

宗春「二年五組の北浦っていいいます。ほく、園内先生のが好きです。一年のころからずっと好きです。ほくとつきあってくださいー！」

花束を差し出す宗春。呆然と宗春を見ている裕美。

真紀（声）「す……」

裕美（声）「拘束型心筋症っていう心臓の難病やったんや、彼」

知慧（声）「心臓の、病気……」

裕美（声）「うん。中一のとときに発症してな。根本的な治療のない難病や。長いこと生きられんこと分かってから、残された時間でやりたいこと全部やることに決めたんやって」

真紀（声）「だから」

裕美（声）「うん。それからラブレターいっぱい貰った。ほんまにな、

文字が涙で滲んでるんよ。歌の歌詞みたいやろ」

知慧（声）「それで園内さんはどうしたんですか」

裕美（声）「こ両親にも話し聞いた。息子に思い出遺してやってくれて言われてなあ。休みの日に、デートの真似事するくらいやったらええかなって。映画観に行ったり、二人で買い物したり。他の先生や生徒にばれへんように、わたしの車で、遠出してな」

○宗春を助手席に乗せて海沿いの道を疾走する裕美の車。

裕美（声）「海に行ったときや。あの子はしゃいでなあ」

○海

手を繋いで砂浜を歩く宗春と裕美。裕美の手を離し、突然駆け出す宗春。

裕美「宗春くん！」

驚く裕美。宗春を追いかける。少し走って止まる宗春。膝に手をつけて荒い息を吐いている。

裕美「なにやってんのん！ あかんやないの！」

宗春「走りたかった——一回本気で走りたかってん——最高や。走るって、こんな感じやったんや。先生」

裕美「なに」

宗春「ぼく、好きや。先生のこと、ほんまに好きや！」

宗春をじっと見つめる裕美。やがて宗春を強く抱きしめる。二人、口づけあう。

裕美（声）「あの時わたし、宗春のこと本気で好きになった」

（裕美の回想・終わり）

○【悠連会館・駐車場に戻って

裕美、十人を見渡して。

裕美「聞きたいんやろ。セックスしたよ宗春と。わたしの部屋で。わたしの体知らんと死ぬのいやや、死ぬんやったらわたしの体の中がええって言うたんや、あの子。同情なんかやない。わたしもあの子としたかってん。大好きな男とな——避妊はちゃんとしてたで。したんはその一回だけや」

知慧「それから見つかったんですか」

裕美「え？ ああ、うん。氣いつけてたんやけどなあ——あとは新聞記事に書いてあるとおりや」

美青「——宗春さんは？」

裕美「亡くなったよ。その一週間後や。看取った。」

○病院・宗春の個室（裕美の回想）

ベッドの上、今際の際の宗春。その手を握っている裕美。

宗春「ごめん、裕美さん、ごめん……」

泣きながら首を横に振る裕美。その手を強く握りしめる。

宗春「ありがとう。ほんまに、ありがとう——」

事切れる宗春。号泣しながら宗春を抱きしめる裕美。

○【悠連会館】駐車場

裕美「以上や。そんで地元にもおられへんようになってな。で、流れ流れて縁もゆかりもないここでスーパのパートさんさせてもらっておりますわ——以上や」

立ち上がる裕美。

裕美「どんなセックスしたか訊きたいんやったら、元わいせつ教師が教えたるで、ははっ——これきりや、帰るわ」

去ろうとする裕美。

美青「ふざけないでよ！ 宗春さんは怒ってる！ 悔しがってる！今のあなた見て絶対！」

裕美の足が止まる。

美青「どこがわいせつ教師なの！ 二人が愛し合ってただけじゃないか！ それのどこが悪いのよ！ そうじゃないって自分がいちばん分かってるくせに、なにふて腐れてんのよ！」

裕美「未成年相手に一線を越えたわたしはな、誰がなんと言おうとわいせつ教師なんや」

美青「わたしはそうは思わない！（みんなの方を向いて）今の話し聞いてこの人がわいせつ事件起こしたって思う人がいたら言うて！ そんな人、わたしの友達でもなんでもない！ 今すぐここから出てって！」

美青、泣いている。

沙月「あんまり興奮すると体に障るよ、美青」

香苗「だから言ったでしょ、話し聞いてみなくちゃ分からないって」

飛鳥「だったねえ」

小夜「でも、カッコいいなあ宗春さん。花束持って告白なんてさあ、

わたしも一回されてみたい」

季穂「あんた今までに何回もコクられてるでしょうが」

小夜「花束持つてはさすがにない」

知慧「(真紀に) あんたはあるの?」

真紀「え、なにが?」

知慧「だからダーリンから花束もらったこと」

真紀「そんなのないよ。あ、でもたまにマックのダブルチーズバー

ガーおごってくれたりするよ」

知慧「花束とダブルチーズバーガーをいっしょにするんじゃない

っ!」

笑う誰も。

裕美「あんたら……」

里菜「ね、練習始めようよ、キャプテン」

反応しない真紀。

知慧「あんただよっ!」

真紀「あ、うん。そうだ。はい。練習、始めよう。うん、練習だ」

ベンチ横に転がっていたバットを取る真紀。裕美に差し出す。

真紀「園内さん、ノックお願いします」

真紀を見つめる裕美。

美青「じゃあみんな守備位置に散って! 寿音はタオル持ってシャ

ドーピッチ百回ね!」

寿音「百回ってか!」

美青「不満だったら百五十回!」

寿音「不満じゃないです!」

真紀からバットを受け取る裕美。守備位置にメンバーが散る。

美青「園内さん」

美青を見る裕美。

美青「このチームの監督はわたしです。でも、わたしがみんなに伝

えていることなんて、机上の空論です。だから、いろいろ教えてく

ださい。園内さんの経験、わたしにいっぱい教えてください」

真紀からボールを受け取る裕美——うずくまる。泣く。裕美、ただ泣く。

その様を誰もがじっと見ている。

美青「園内コーチが泣き止むまで全員その場で待機——あ、全員

じゃなかった。寿音はシャドーピッチ百回続行！」

寿音「えー、わたしだけなんでー」

美青「不満だったら二百回！」

寿音「不満じゃないです！ てか、増えてるじゃん！」

誰もが笑う。裕美が泣き続けている。

(F・O)

○【悠連会館】駐車場

(TⅡ 一年後・春)

真紀たちの練習風景。ノックを打っている裕美。格段に上達している内野陣。

外野にフライを打ち上げる裕美。難なくキャッチする飛鳥、

小夜、香苗。

キャッチャーフライを打ち上げる裕美。

真紀「オーライ！」

キャッチする真紀。マスクを取って裕美を見てニッと笑う。

裕美「キャッチャーがファウルフライ捕れるのなんか当たり前」

真紀「——はい」

真剣な表情でシャドーピッチングを繰り返している寿音。

ベンチの美青、メモを取りながら練習を見ている。

○茜川高校・小運動場

松下の前に立っている女子ソフト部の部員たち。きつい目で

松下を睨んでいる。気おされている松下。

○【悠連会館】駐車場

練習終わり。美青の前に集まっているメンバーたち。

美青「えー、まずはみんな無事進級できてなによりです」

知慧「キャプテンは数学追試追試でたいへんだったけどねー」

真紀「うるさいなあ、もう」

笑いがおきる。

美青「園内コーチのおかげでみんな本当に上達したと思う。オジサ
ンたちのチームに普通に勝てるようになったしさ。みんなもう

女子ソフト部が休部になったのは知ってるよね」

知慧「全員退部だって。ざまあみろっての」

里菜「新入生の募集もないの？」

美青「うん。松下先生完全に自信なくしちゃったみたいで、他に顧
問の成り手もないんだって。だから小運動場が空いたの」

誰もを見渡す美青。

美青「ねえ、わたしたちが使わない？ 小運動場」

季穂「いや、でもわたしたち部活でやってるわけじゃないし」

美青「だからするの、同好会に」

季穂「同好会に」

美青「うん。昨日生徒会室行って聞いてきた。設立趣意書っての出
して生徒会役員と先生の審査通ったらできるんだって。小運動場

空いたし、たぶん大丈夫じゃないかって」

飛鳥「小運動場使えるのか。確かにそれは魅力だね」

香苗「同好会でも顧問が要るでしょ？」

美青「うん。それも考えてる。現代文の若本先生に頼もうって思っ
てる」

小夜「なんで珠代ちゃんに？」

美青「若本先生、幽霊部員しかいない新聞部の副顧問なんだ。なに
もやってないのといっしょだから、頼んだらきつと引き受けてく
れる。それに、わたし、好きなの、あの先生」

知慧「うん、珠代ちゃんサッパリしていいよね。わたしも好きだよ」

美青「それにね、同好会になったら、女子学生野球連盟にも登録で

きる。加入の手続きは二月が締め切りだから今年はもう無理だけど、来年登録できたら全国大会の出場かけて、関東予選にも参加できる」

香苗「でも、そうならさ——」

輪から少し離れたところに立っている裕美を見る誰も。

美青「それも聞いてきた。外部指導者ってことで届けだしたら大丈夫だつて。野球部とか女バスとかもそんな感じでコーチがいるんだ」

知慧「相変わらず準備バッチリだね美青は——裕美さん、ということなんですけど」

答えない裕美。

知慧「学校で指導するのは、やっぱりイヤですか」

裕美「——その珠代ちゃんにわたしのこと伝えること。それでいっしょにやりたくないって言うたら、もうやらん」

真紀「そうならべつに小運動場とか同好会とかいいですよ。裕

美さんの指導受けられなくなるほうがイヤだもん。ね、美青」

美青「え——うん」

頷く美青。誰も。

知慧「またこれだよ……」

真紀「え」

知慧「ほんと、ふだんしょーもないことしか言わなくせして、たまーにこういうことを、この女は……」

苦笑する裕美。

裕美「帰るわ」

駐車場を出ていく裕美。自転車に乗って去る。

香苗「大丈夫だよ、珠代ちゃんだったら」

小夜「確かに。なんかそんなの気にするタイプじゃなさそうだもんね」

美青「だから若本先生が、いいかなって」
季穂「さすが監督」

美青「じゃあ、この話し異存ないってことで、いいかな」

頷く誰も。

真紀「茜川高校女子野球同好会かあ。なんだかっこいいね」

美青「うん。通称《茜川オダマキーズ》」

真紀「はあ、なにそれ!？」

美青「わたしが考えた。ダメ？」

真紀「ダメに決まってるでしょ! なんでわたしの名前なのよ!」

美青「真紀の名前にかけてるだけじゃないよ。オダマキって花があるの、ほら」

美青、ノートに挟んでいたオダマキの写真を見せる。

沙月「なんか、ヒトデみたいな花だね」

里菜「でも、見ようによっちゃかわいいよ」

季穂「たしかに」

美青「花言葉がね、赤が『心配して震える』、紫が『勝利への決意』、

白が『あの方が気がかり』で、全般の花言葉が『愚か』と『必ず手に入れる』どう」

知慧「——いいね、なんかそれ」

美青「でしょ」

真紀「ちよっとお……」

香苗「わたしもいって思う。すごく」

真紀「香苗まで——」

知慧「イヤなの、あんた」

真紀「イヤに決まってるじゃない! チームと自分の名前が同じなんてありえない!」

知慧「じゃあ、決をとろう。《茜川オダマキーズ》に反対の人手を挙げて!」

バツと手を挙げる真紀。一人だけ。

知慧「じゃあ《茜川オダマキーズ》に賛成の人!」

真紀以外の全員が手を挙げる。

知慧「ということだ茜川高校女子野球同好会の通称は《茜川オダマ

キーズ」に決定！ 拍手！」

拍手が沸き起こる。

真紀「ちょっと待ってよお……」

美青「茜川オダマキーズが、朝霞学園女子野球部を倒すのよ」

美青を見る誰も。

美青「朝霞は今年の夏の全国女子軟式野球大会の中高生の部に出る。

きつと優勝する。その後、もう一回朝霞とやる」

知慧「全国優勝した朝霞に、わたしたちが」

美青「そう。絶対に勝つ」

知慧「——ほら、オダマキーズキャプテンの織田真紀。こういうと

きは円陣でしょうが」

真紀「エンジン？」

知慧「エンジンじゃなくて円陣！ ほら、みんな早く！」

円陣を組むオダマキーズの十人。

知慧「ほらキャプテン、なんか言ってる！」

真紀「もう——えーっと、なんか変な名前になっちゃって、納得い
つてないんだけど、みんながいろいろのならば……あああ、オ
ダマキーズでいいよ、もう！ いっぱい練習して、裕美さんのノ
ックいっぱい受けて、もっと上手くなって、オジサンチームなん
か簡単に負かすようになって、それで、それで全国優勝した朝霞
に勝つ！ 絶対に勝つ！」

全員「おう！」

知慧「ほら、美青も！」

美青「——じゃあわたしがゴーって言ったらみんなオダマキーズ
って言って！ 行くよ！ 力つけて絶対朝霞に勝つよ！ ゴー！」

全員「オダマキーズ！」

円陣が解ける。拍手が自然と沸き起こる。誰も顔に笑み
が浮かび、頬がピンクに染まっている。

○茜川高校・職員室（昼休み）

弁当を食べている珠代。その後ろを過ぎようとしていた松下。

松下「ああ、若本先生」

珠代「はい」

松下「女子野球同好会の顧問引き受けられたんですって？」

珠代「あ、はい。なんか熱心に頼み込まれちゃって」

松下「ソフトや野球のご経験は」

珠代「ありませんけど」

松下「それで、引き受けられたんですか」

珠代「はい。練習の指導は外部の女性の方がされるそうですし、ま、

いつかな、と」

松下「『ま、いつかな』ですか」

珠代「はい」

松下「そうですか——あゝあ、なにがいけなかったのかなあ。一生

懸命やってきたんだけどなあ……」

去っていく松下を見ながら弁当を食べ続ける珠代。

○【アドラブル】店内

カウンター席に座っている沙月と季穂。

沙月「熱いよね、美青」

季穂「うん。激アツ」

沙月「本当はさ、自分だって練習したいんだらうね」

季穂「当たり前じゃん——でも、あの子言ってたよ『体調いい日が

増えた』って」

沙月「うん。この前もさ、投げたもんねナックル。三球続けて」

季穂「うん。裕美さんもびっくりしてた」

●インサート・茜川高校・小運動場

マウンドに立っている美青。バッターボックスの裕美。

キャッチャー真紀のミットに向けナックルボールを投げる美

青。驚く裕美。ボールを捕れない真紀。

沙月「でもさ」

季穂「なによ」

沙月「朝霞に勝つためにはこのままじゃいけないよ」

季穂「なにかよ」

沙月「だからボールとかもっとほしいじゃん」

季穂「たしかに」

沙月「ピッチングマシンとか、そんなのも」

季穂「いくらぐらいするの、それって」

沙月「知らないけど。あとさ」

季穂「うん」

沙月「ユニフォームとか作りたい」

季穂「だよね」

厨房で競馬新聞を読みながら二人の話を聞いていた讓吉。

讓吉「沙月はさ、誕生日二月四日だったよね」

沙月「そうだけど」

讓吉「季穂ちゃんは？」

季穂「四月十二日。沙月より一年近くお姉ちゃんです。姉と敬え」

沙月「黙れババア——それがどうしたのよ」

讓吉「きみたちに野球と競馬の神様が微笑みますように」

ウインクをする讓吉。

沙月「なによ気持ち悪い」

笑って二人を見ている讓吉。

○2009年の天皇賞（春）、最後の直線からゴールインまでの映

像に讓吉の声が重なる。

讓吉（声）「よし！ よし！ そのまま、そのままっ！ マイネルキ

ッツ抜けた！ 抜けた！ アルナスラインそのままっ、そのま

ま！ よっしゃー！ 三着ドリジャニだろ、これ！ 外だろ！

絶対外だこれ！ 来たよこれ！ いくらつくんだおい！」

○茜川高校・小運動場

沙月が箱を傾け、中の軟式球をグラウンドに落とす。

沙月「とりあえずダース買って来た」

知慧「いくら儲かったの、沙月のおじさん。その天皇賞ってやつで」

沙月「五百円が百十万ちよつとになったんだって」

真紀「百十万……すごい」

沙月「ソッコロ祥子ちゃんに管理された。『これはオダマキーズのお金』って。譲ちゃん半泣きになってたわ」

季穂「仕方ないよ。マスターそのつもりでうちの誕生日訊いてその馬券買ったんだもん」

沙月「まさかホントに当たるとって思ってなかったみたいだけど」

季穂「今ヤフオクでピッチングマシン探してるんだ」

里菜「そんなのも出てるの?」

季穂「うん。中古のやつだけどいくつか出てる。明日プリントアウトしてくるから、みんなで選ぼうよ」

沙月「あとさ、ユニフォームも作ろうよ。ね、美青」

美青「え」

沙月「美青がデザインしてよ」

美青「——ありがとう。でも、それはみんなで考えようよ。すごいかわいくてかっこいいの、ね」

笑い、頷く誰も。

飛鳥「練習着も作りたい。いつまでも学校の体操服じゃやだ」

小夜「ピンク色とかいいよね」

香苗「目がチカチカするよ、そんな練習着」

盛り上がるメンバーを見ている裕美と珠代。

珠代「みんな楽しそう——それが、ノックバットですか?」

裕美「え——はい。金属バット五本とこれも買ったみたいです」

珠代「へえ、当たるんだなあ、馬券って。わたしも今度買ってみようよ」

裕美「あの、いいんですか」

珠代「何がですか?」

裕美「だから、そういうお金で用具を」

珠代「べつにいいんじゃないですか、同好会で部費も出ないんだし。

お金に綺麗も汚いもないですよ。あの子たちあんなに嬉しそうなんだし」

裕美「そうですけど——あの若本先生」

珠代「はい？」

裕美「あの子たちから聞かれていますよね、わたしのこと」

裕美を見る珠代。

珠代「園内さん」

裕美「はい」

珠代「今日、飲みに行きませんか？ アパートの向かいにね、いい感じの居酒屋があるんですよ」

微笑む珠代をじっと見つめる裕美。

○居酒屋【すず香】・外景（夜）

暖簾が出ている。

○前同・店内（夜）

小ぎれいな店内のテーブル席に座り、向かい合って飲んでいる珠代と裕美。裕美、生ビールの中ジョッキをゴキユゴキユと。

珠代「あー、旨い。マジで旨い」

裕美「強いですね」

珠代「え、はい。園内さんももっと飲んでくださいよ」

ハイボールのグラスをチビリとやる裕美。

珠代「不治の病いの教え子と道ならぬ恋か——なんか憧れちゃうな。

無神経に言っちゃいますけど」

裕美「——無神経です」

珠代「分かって言ってます——園内さん」

裕美「はい」

珠代「わたしね、大学生のときランパブでバイトしてたんですよ」
裕美「え」

珠代「ランジェリーパブ。下着で接客するお店。二回生の春に父親が交通事故で死んじゃって。学費自分で稼がなきゃいけなくなっ
たんです。三流私大で学費だけはいっちょ前。昼は昼でウェイ
レスやったり、ポスティングやったり。バイト三昧」

裕美「そうなんですか」

珠代「セクキャバとかだったらもつと稼げたんですけど、さすがに
おさわりありはね。おかげで当時つきあってた彼氏と別れちゃい
ました。ははは」

裕美「――」

珠代「常連客に水野って人がいたんですよ。大企業の部長。ずっと
わたしを指名してくれて、チップもくれてた太客。同伴も何度も
しました。ホテルにも何回か誘われました。もちろん断ってまし
たけど」

裕美「そう」

珠代「で、卒業前にそのバイトもやめたんですけどね」

裕美「うん」

珠代「会ったんですよ、すぐに入学式で」

裕美「入学式？」

珠代「ええ。彼、最初に赴任した高校のPTA会長だったんです。

来賓として来てました。挨拶なんかしちゃって」

裕美「気づかれたの？」

珠代「ええ。新任教諭も挨拶しますからね。じつとわたしのこと見
てました」

裕美「それでっ？」

珠代「『やらせろ』ですよ」

裕美「えっ？」

珠代「『風俗業でバイトしてたのバラされたくなかったらやらせろ』
ですよ。どこで調べたのか知らないけど、住所調べてこの時代に

手紙です。『君と契るためならぼくは非道者にでもなる』とか書いてやんの。てか契るとか言ってんじゃねえっつの、気色悪い」

裕美「それで」

珠代「やりましたよ、あんまりしつこかったから。やっすいラブホで」

裕美「——」

珠代「今だったら、適当にあしらえたと思うんですけどね。断ち切るにはそれしかないって思っちゃったんですよ。バカですよ」

裕美「そうですか」

珠代「それ以降、関係はありませんよ。もう一回求めてきたら、どうなってもいいから奥さんにも会社にも全部ばらすって言いましてから」

裕美「……」

珠代「本気で、そのつもりでしたよ。腹くくってましたから」

裕美「ええ」

珠代「わたしの方が質が悪いですよ」

裕美「え」

珠代「園内さん、彼からもらった手紙は？」

裕美「あの子たち、そんなことまで」

珠代「今もお持ちですか？」

裕美「——はい」

珠代「ですよね。うらやましい。わたしなんて、あの男からの手紙、読んだらすぐにグシャグシャに丸めて捨ててましたよ。最後の方なんか封も開けなかった——知ってます？ 濡れないセックスってね、心も体もただ痛いばかりなんですよ」

笑ってジョッキを傾げる珠代。

珠代「人生なんて紙一重じゃないですか、園内さん。わたしだって、どうなってたか分かりません」

微笑む珠代をじっと見る裕美。

珠代「——ねえ、園内さん」

裕美「はい」

珠代「わたし、まだ練習三回しか見てないけど、あの子たちが園内さんを信頼してるの、分かります。わたし、運動全然ダメだけど、園内さんがいい指導者で、いい先生だったことは、練習見れば分かる。これからもあの子たちのこと、よろしくお願いします。わたしも顧問として必ず練習には顔を出します」

頭を下げる珠代。

裕美「——はい」

○路上（夜）

コンビニの袋を手にして、道の真ん中でスキップをしている裕美と珠代。珠代、スキップができない。それを見て爆笑する裕美。

裕美「なんで！？　なんで！？　スキップできんとかありえへん！」

珠代「るっさいなあ！　だから運動ダメって言ったじゃん！」

ガクガクと不細工なスキップをくりかえす珠代。

裕美「あかん！　ヤバイ！　それはヤバイ！」

路上にへたりこんで笑う裕美。

裕美を見ながら笑ってできないスキップを続ける珠代。

（第三話・了）